

諏訪の未来を考える

100年前の地図を手にまち歩き

地域ネットワーク会議

今年度の諏訪地域ネットワーク会議が23日、諏訪市末広のコミュニティスペース「みんなの居場所ゆめひろ」などで開かれた。6市町村の生活支援体制整備事業担当者や生活支援コーディネーター、地域おこし協力隊ら約30人が参加し、100年前の地図を片手に市総合福祉センター湯小路いきいき元気館からゆめひろまで、まち歩きを実施。それぞれが目に留まった面白いものを写真に収める「お宝探し」とワークショップを通じて未来から現在を俯瞰し、これからの諏訪のまちづくりに

ついて考えた。

同会議は県諏訪保健福祉事務所と県長寿社会開発センター諏訪支部が主催。シニア世代の社会参加活動の促進を図り、市町村担当者やコーディネーターの連携の場として年1回開いている。

今回は、まち歩きで今と昔の暮らしを見詰め、諏訪の未来を考える新たな視野を獲得しようと企画。県長寿社会開発センターのシニア活動推進コーディネーター下倉亮一さんが進行役を務めた。

参加者は5グループに分かれて元気館を出発。昔ながら

の共同浴場や温泉の出る蛇口、消火器、ベンチなどを撮影しながらまち歩きした。

ゆめひろに到着後はワークショップを実施。歩いたルートを100年前（大正時代）の地図に書き込み、見つけた「お宝」の写真を貼り付けた。

撮影した理由も付箋に記し、「至る所に御柱がある」「かつてはみんな鉄平石を使っていた」「線路脇の花の手入れがされていてすてき」などと気付きを共有した。

1925（大正14）年の南信日日新聞（現長野日報）の紙面も閲覧し、100年前の



ワークショップで大正時代の地図を広げ、まち歩きでの気づきを共有する参加者

諏訪の姿を想像。将来の世代が満足する諏訪のあり方を考え、2125年の未来を生きる視点に立って2025年の今にメッセージを送った。

参加した下諏訪町地域おこし協力隊の三池澤陽香さん（28）は新しい視点で歩いてみると、古い建物が多く想像とのギャップがあった。歴史あるものは

未来にも残していけたら良い」と話していた。（松本佳林）